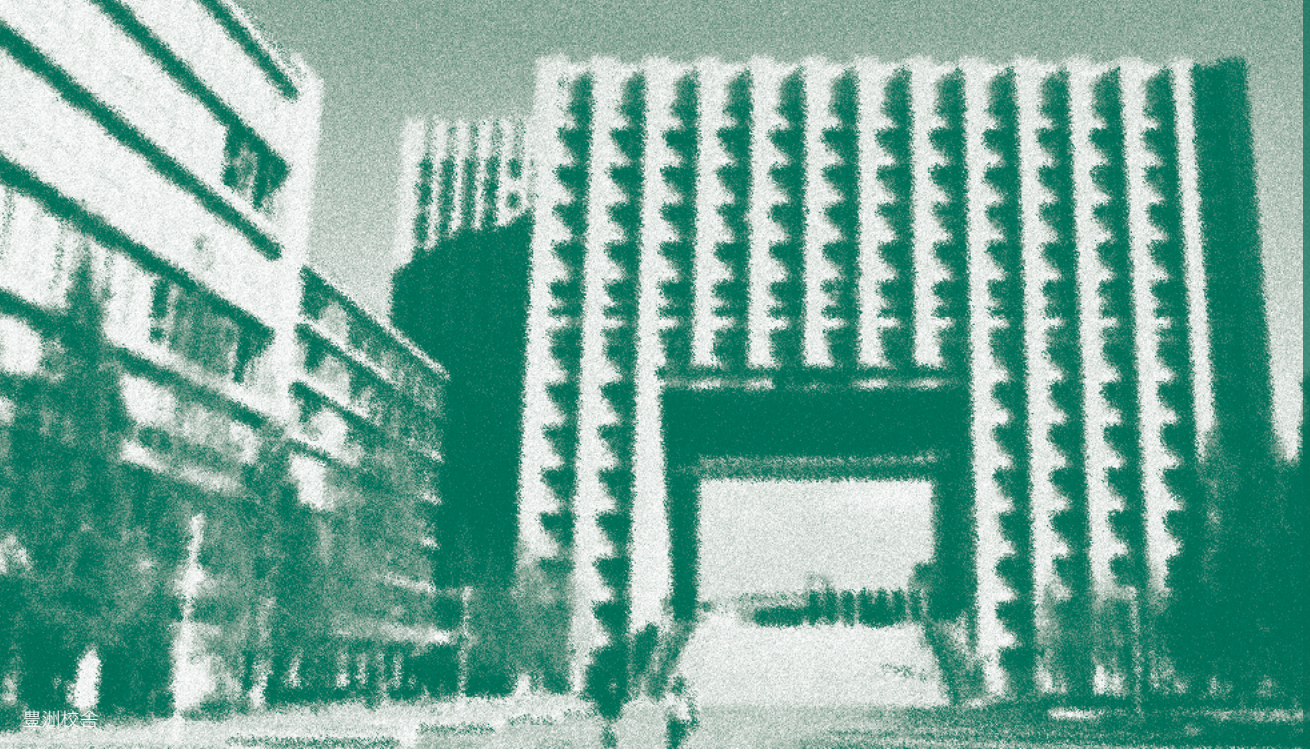


建築学科卒業生たより
芝浦工業大学
建築会
vol. 32
2016年11月

芝浦工業大学建築会
135-8548
東京都江東区豊洲3-7-5
TEL. 03-5859-8400
FAX. 03-5859-8401
http://sit-arch.com

建築会へのより高い関心と協力を

建築会 会長
枝広英俊（一九七一年卒）

建築学科は、一昨年（二〇一四年）に芝浦工業大学工学部として認可・設立されて六十周年を迎えたことから、定期総会に引き続き、来賓、元教員、現教員、卒業生および学生等の多数の出席を得て、節目としての記念式典を開催することができました。翌年三月には、建築学科六十年の変遷や建築学科元教員や卒業生の寄稿文およびシンポジウムの記録、さらには記念式典や懇親会の写真も含めて三百ページ近くの記念誌を発刊することができました。建築学科卒業生には、在籍した証・想い出として是非とも手元に一冊置いて頂きたいと願う次第です。現在も別掲の案内の通り、建築会事務局において先着順で販売しておりますので、関心のある方はお問い合わせの上、是非、早目にご購入頂ければと思う次第です。

また、二〇一五年十二月には建築会同窓会（第三回）が会則の目的「会員相互の親睦を図るとともに、建築に関する学術および技術の進歩に寄与すること、さらに学生・院生等の育成に寄与すること」に従って開催されました。さらに、二〇一六年四月には、一九七〇年前後の建築学科卒業生の企画により、建築学科合同クラス会が開催され、当時の教員とおよそ二百名の旧友が一堂に会しました。詳細あるいは概要については本会報でも特別記事として別掲しておりますので、そちらをご覧頂ければと思う次第です。

一方、芝浦工業大学は、本年で創立後八十九年を迎え、来年の二〇一七年には九十周年を迎えようとしています。その二〇一七年に建築学科は新たな局面を迎えようとしています。既にご存じの方も多かろうとは思いますが、同年四月には工学部建築学科と建築工学科およびデザイン工学部建築・空間デザイン領域の三学科が統合・再編され、建築学部を開設して三コース（空間・建築デザインコース、都市・建築デザインコース、先進的プロジェクトデザインコース）で教育・研究や入学試験、就職相談および学位授与式等が進められることになります。

そして、一九六六年以来、約五十年間に亘って一、二年生の大宮キャンパスでの多様な教養や専門基礎等の履修を変更し、豊洲キャンパスでの四年間都心一貫教育が行われることで準備が進められています。建築学科元教員の一人として、また建築会会長として、魅力ある建築学部教育がなされ、教員と学生の良好な関係が築かれ、多才な学生の育成と卒業後の活躍などを期待する次第であります。一方で、建築会と建友会（建築工学科の同窓会）およびデザイン工学科の卒業生との連携を今後どのようにしていくかを考えていかなければならない時期が数年後に必ずやってきます。既に常任幹事会でも議論を交わしていますが、卒業生諸氏のお考えも幹事会や総会を通じて参考にさせて頂ければ幸甚です。

さて、本年度の建築会の活動計画ですが、主に以下の内容について進めて参りますので、より多くの方々のご協力を宜しくお願いする次第です。

○建築会会報の作成と発行
○建築学科　学位授与式への出席と建築会賞の授与
○建築会総会・同窓会の活性化、
　建築会組織の結束の高揚
○会費の納入のお願い、及び会計の透明化と健全運営
○学科支援および学生支援の推進と卒業生支援の検討
○校友会支部への参入を前提とした準備　など

今後とも、建築学科卒業生相互の輪を広げ、絆を深めることが必要であると考えています。建築学科卒業生の総会・同窓会等への参加と協力を宜しくお願い致します。

最近のこと

菊池廣子（一九六七年卒）

今年の三月に七十一歳になり、一つの住宅の仕事が終わったのを潮に仕事をリタイアしようと思いました。九十五歳の母との二人暮らしをしながら、『さあこれから終活を』と思うと、あっという間に三か月経ってしまいました。

自分の周りで二つの事が起こり、幸も不幸も関わらざるを得ない状況に忙殺されていました。一つは娘の二人目の出産の手伝い、殆ど上の孫の守りでこれは楽しかった。もう一つは友人の死と残された家族、子どもは障害者で行く末の顛末や後始末でした。自分自身も後何年生きるかわからないのにこんな風に流されて時を過ごしてしまっていることを思うと何も片付かない、終活に手が付かない内に恥をさらして旅立つことになりそうです。

そんな時、また極小住宅の設計をすることになりました。長年、設計にどっぷりとつかってきた習性からは簡単に抜けられない自分と向き合って、人生の終わりの時に極小住宅を設計しなければならないことは今まで豊かな物や人の生活の器としてそれを肯定してきたことを思い切って方向転換しなければならない啓示と受けとめています。

人は、何も持たないで生まれ、そして何も持って行けないことに、今更ながら思いを馳せています。今まで私は、あるがままの自分を良しとし、自然体で自由奔放に生きてきて、友人や周りの者からは子供のようだと呆れられたりしながらも、少し得意げに過ごしていたのではないかと思っています。そうして身についてしまった心や物の垢を捨てることが出来るのだろうか。まだまだ強い執着があります。

これから設計する家がどんな風になるか、きっと今までの価値観を捨てないと出来ない予感があります。楽しみに取り掛かろうと思っています。

【シグマ設計工房】

近況報告

増山 栄（一九七二年卒）

我々はいわゆる団塊の世代であります。昭和四十三年、地元の工業高校の機械科を卒業し胸膨らませて建築学科に入学しました。時はまさに動乱の時代でありました。入学から卒業までキャンパスはバリケードの中にありました。私は昼は講義を受け（休講も多かったと記憶している）、夜はデザイン学校に通学しデッサンや写真に凝っていました自分なりに有意義な四年間を過ごしたと思っています。

昭和四十七年の春、卒業式らしいことも無いまま世の中に出て卒業と同時にデザイン学校の恩師が経営する市ヶ谷三番町にあるアトリエ事務所に就職しました。そこに六年間お世話になり、生家のある土浦市に帰郷、昭和五十三年に建築設計事務所を立ち上げました。五十八年法人化し、今年で三十三年を迎えました。現在十八名の所員を抱えています。

この間、多くのプロジェクトを経験してきましたが、近年は、福祉施設の設計依頼が多く受注ベースで約六割を占めています。特別養護老人ホームを代表に高齢者施設や障害者・児童施設、保育園、等々。その中の作品には受賞の栄誉を受けた施設もいくつかあります。

さて、私事で恐縮ですが、近況報告を少し述べさせていただきます。一男二女の子供達も既に結婚し、現在五人の孫がいます。還暦の歳に胃がんで三分の二を摘出しました。経過は順調で六年が経過し、以前と全く変わらぬ生活をしています。事務所経営は六十五歳で引退し、後継者に委ねようと計画していたのですが、丁度六十五歳の時、春と秋に大きなコンペで二回のホールインワンを達成し、賞金と保険金を手にしました。練習場にはほとんど通ったことがなかったのですが、今は熱心に通っています。それとこれとは関係はないのですが、事務所経営も七十五歳まで現役を延期することにしました。次は三回目のホールインワンとエイジシューターを目指します。

【株式会社増山栄建築設計事務所代表取締役】

校友との出会い

林田和雄（一九七七年卒）

私は、一九七三年、芝浦工業大学付属工業高等学校を卒業後、芝浦工業大学建築学科へ入学しました。時は折しも学生運動が下火になったとは言え、まだ運動の火種は燻っており、大宮キャンパスでは毎日、アジ演説が行われていました。

一般教養を受講するため、大宮キャンパスに通う毎日でしたが、学生生活にも慣れ、多くの学友・知人と知り合い、楽しい学生生活を送りました。沖種朗先生の設計された図書館に通い、終日過ごしたことなども懐かしい思い出です。

現在の大宮キャンパスは、私達が通った当時と比べれば、雲泥の差があり、立派なキャンパスに生まれ変わっています。当時の学校周辺には、床屋が一軒、あとは麻雀屋が数軒あった程度と記憶しています。東大宮駅のプラットホームから大学キャンパスが見えた記憶があり、大学の周辺は畑と大きな池がある程度であったと思います。休講ともなれば時間をどう使うか、大変苦労したことを思い出します。

卒論では、一般構造研究室（旧枝広研）にお世話になり、「軽量コンクリートの耐火性能」について学びました。真夏の実験棟は大変厳しい環境であり、塩を舐めながら実験を続けた思い出は、今でも語り継がれています。

卒業後は、建築設計事務所に勤務。主に公共建築の意匠設計を担当し、現場監理を含め多くの施設建設に関わらせて頂きました。都内では都立工芸高校、足立区の警察署などが思い出深い作品となりました。

これらの設計・監理業務を通して多くの発注元の部門や関連会社の方々とお知り合いになり、指導、激励、叱咤を頂き成長できたと感謝しています。特に、校友会活動を通して、後で分かったことですが、業務で知り合った方々が芝浦工業大学卒業生であったり、研究室の先輩であったりと、驚く事ばかりでありました。そうした先輩に支えられて今の自分がある事に感謝しています。次は、私が後輩を守る立場であると深く決意している毎日です。

【港区議会議員】

新国立競技場問題が象徴するもの

進藤憲治（一九八二年卒）

経済の低迷、会場建設の遅れ、治安への不安を抱えつつ、ついにリオの熱い戦いが始まった。大会初日から日本選手のメダルラッシュが続く大活躍である。

一方、四年後の東京大会に目を向けると着実に準備が進んでいるとは言い難い。デザインや建築の分野でも不協和音が聞こえてくる。エンブレム選考の不透明さと盗用疑惑、新国立競技場の建設費高騰、そして決定者の不明瞭さに国民の不信感は拭い去れない。結果、デザインがもつ魅力と建築家への信頼が低下した。デザインと建築を取り巻く社会環境が激変しているのが分かる。

私がオリンピック関連の施設設計に関わり始めたのは、二〇〇〇年国際コンペで広州国際展示センターが最優秀賞となり基本実施設計を行ったのが始まりである。その後、二〇〇八年北京大会で使用する五大競技場のうち、天津オリンピックスタジアム、瀋陽オリンピックスタジアムと二つの国際コンペに最優秀となり設計から監理までを行った。その苦労の甲斐もあり、二つのスタジアムは共に中国建築学会作品賞を受賞し、日本では天津スタジアムが日本プロジェクト大賞を頂いた。その後も二〇〇八年深圳湾スタジアム体育センターも最優秀となり、二〇一〇年ユニバーシアード大会のメイン会場となった。

今回東京大会のスタジアム設計に関わることはないが、国際放送センター／メインプレスセンター（IBC／MPC）に利用される東京ビッグサイト増築棟設計に携わっている。IBC／MPCは約二万人のジャーナリスト・カメラマン・放送関係者等のメディア関係者が利用する施設となる。この施設では展示機能に加え、世界各国から集まるメディア関係者へのおもてなし空間の創出が一つのテーマである。各国メディアが世界へ発信する施設において、多言語対応、ユニバーサルデザインと誘導ソフトの開発を含めた、総合的な建築の魅力を創出する新たな展開を示したい。

十五年程前に非常勤講師として母校の建築教育に携わらせて頂いた。現在は日本建築家協会（JIA）の関東甲信越支部役員として若手育成と会員拡大に力を入れている。近年は建築設計を志す学生が減少しているため、建築家を志す学生のための一助になればと活動している。建築を目指す学生と若き建築家は是非、学生会員・ジュニア会員になり、各々の立場から進んで建築界に寄与してほしい。

【佐藤総合計画　設計室　プロジェクトリーダー】

患者に寄り添う建築をめざして

桐谷広二（一九八七年卒）

卒業後、大阪のゼネコン設計部に籍を置いて二十七年になります。その間、主に医療施設の設計に取組んできました。特に医療施設は、高度な専門性、医療の技術革新に対応可能な可変性など、高機能、高品質に対応できる技術力が求められ、設計チームのみならず、組織力を生かした総合的なソリューションが求められる分野にあたります。幸いにも、入社以来、企画段階でのプロジェクトの仕込み、基本設計から詳細設計に至る医療従事者や事務局へのヒアリングと作図、そして着工から竣工までの施工段階での現物の造り込みとプロジェクトの設計全般で様々な方々と関わりつつ、建築だけでなく医療の専門的な知識の習得と経験をさせて頂きながら今日に至っております。最近では二つの大規模な公立病院の設計に取組んでいるところです。

医療建築に取組む中で特に意識する事ですが、事業主や医療従事者の潜在的なニーズは何なのか。様々な要求に対して適確な提案が出来ているかという点です。もう一つはエンドユーザー、病院では患者さんにとって快適な建築になっているかという問いかけを忘れないという点です。時として相反する視点からその答えを導き出さなければならないケースでも如何にしてバランスを取るか、あるいは

別な角度から解決策を見つけられないか。その過程に設計の醍醐味があると言ってもいいかもしれません。忙しい中でも充実感のある日々を過ごしております。

また、プライベートでは五十歳を過ぎたところで大学時代に少しだけかじったテニスを二十六年ぶりに始めました。まだ初級者ですが、毎週日曜日のスクール通いと月一回の同僚とのナイターゲームを楽しんでおります。

体力的には無理のきかない年齢になってきましたが、気持ちは若さを保ちつつ、これからまだまだ若い世代に負けない意気込みでいろんな事にチャレンジして行きたいと思います。

【竹中工務店大阪本店設計部勤務】

平成四年卒ですが、卒業アルバムは平成三年です。

佐藤敬文（一九九二年卒）

平成四年に学部卒業後、故郷の秋田に戻り、県庁に入庁しました。以来二十四年間、建築行政に関わる仕事をして参りました。現在は県北にある北秋田地域振興局で、建築主事の一人として建築確認申請の審査などの業務を担当しております。学生時代、建築法規の授業などほとんど真面目に受けておりませんでしたので、役所に入ってからは、難解な建築基準法との格闘と猛省の日々を送ってきました。他には県有施設の営繕、県営住宅の管理などの業務を担当してきました。

今までの仕事の中で特に記憶に残っているのは、新潟中越地震、新潟中越沖地震、東日本大震災の際の被災住宅応急危険度判定活動でした。倒壊した家屋を目の当たりにし、自然の大きな力の前では人間は無力だと絶望する一方で、耐震に考慮した建物は被害が少ないことを実感しました。また、日常が一瞬にして非日常と化した時、住む家があるということが、どれだけ人に安心感と勇気を与えるかということを知り、耐震改修の重要性を肌で感じました。有事の備えは平時から。各地で群発地震が発生し、防災意識や耐震への関心が高まっている今こそ、改修に向けての動機付けになるような施策を進めていかなければならないと感じています。

話は変わりますが、現在私は芝浦工業大学校友会秋田支部の会計幹事をしております。支部会員には建築学科卒の方も多く、年に一度の総会・懇親会とゴルフコンペ等で交流を深めております。総会では、大学本部と校友会からお客様をお招きして、母校の最新情報をお聞かせいただいております。今年は校友会副会長の枝広先生に御参加いただき、来年開設の建築学部や箱根駅伝への挑戦などについてお話いただき、大変楽しい時間を過ごすことができました。秋田支部はとても和気あいあいとした雰囲気で、卒業後もこうしたご縁が続くのも、芝浦工大の温かい諸先輩方に恵まれたからと感謝しております。

【秋田県北秋田地域振興局　建設部建築課】

異国での二年間

浅野孝信（一九九七年卒）

もう三年以上前の事になりますが、JICA（ジャイカ、国際協力機構）の青年海外協力隊に参加し、南アジアのブータン王国にて建築設計に従事する機会を得ました。本建築会報第二十六号にて参加前の心境を執筆させていただきましたが、本稿ではその活動内容のご報告も兼ねて書かせていただきたいと思います。

首都ティンプーの内務文化省文化財保護部にて、伝統建築物の調査・保存及び増改築の設計という任務でした。建築対象が寺院や城郭という特殊性から、日本での仕事の実績は殆ど意味をなさず、赴任当初はほぼ知識ゼロからのスタート。木造でもRCでもない「版築」という甚だ畑違いの分野に、ボランティアとして派遣された身でありながら、自分と一回りも歳の離れた若い現地職員に手取り足取り学びつつの業務遂行。それでもやはり日本人としての誇りは捨てずに、こちらから教え伝えられる事は適所に織り交ぜながら何とか現地にとけ込みました。プロジェクトを私一人に任されるようになった頃には、標高四千から五千メートル級の山岳地帯を現地シェルパと共に二週間以上かけてひたすら歩き、秘境中の秘境に建つ寺院の改修調査という、苦行にも似た出張も与えられました。壮大なヒマラヤの自然の中を往く経験は現地人にしても希有な事で、今振り返れば通常外国人に開かれていないルートを業務としてですが踏破できた事は貴重な体験でした。

また赴任中、残念な事に国宝級とも言える城郭が漏電火災により一夜にして消失するという大惨事があり、活動後半の殆どはその復旧調査に携わりました。国家プロジェクトへの参画に身の引き締まる思いでしたが、離任時ブータン国王に面会でき直々に感謝の意をいただき、二年間の苦労が報われる思いでした。また帰国後も東宮御所にて皇太子同妃両殿下への活動報告の機会が与えられ、ねぎらいのお言葉を賜りました。

個人的には充実した活動でしたが、総括すると順風満帆な日々ではありませんでした。赴任中に日本では東日本大震災が起き、災害の惨状を情報として耳に入れながらも異国の地にて何もできず歯痒さを味わいながら現地生活を送り、また私と同時期にアフリカの某国に派遣された芝浦工大建築工学科の同期学友が、任地にて交通事故で亡くなるというショッキングな出来事もありました。大きく報道はされませんが全世界でほぼ年に一件くらいの割合で関係者に殉職者が出てしまう現実。記憶に新しいところではバングラデシュにてJICA関連会社の方々がテロに巻き込まれました。「世界で人々の役に立つ」という強い志だけではどうにもならない無念の一面もあります。受難も伴う事業ではありますが、各関係者、諸先輩隊員のこれまでの功績に鑑み、脈々と続く活動が良い形で継続されていく事を願ってやみません。

【プロトスタイル株式会社】

感性を育む

岩嵜康明（二〇〇二年卒）

最近はまっていることは、ファミリーキャンプ。メンバーは、妻と五歳の娘と一歳の息子と私の四人。二人の子供を授かってから、たまに考えることは、「我が家にとっての豊かさとは何か」ということと、「子供達に伝えたいことは何か」である。

我が家にとっての豊かさについて私が出した答えは、「好きな人と好きな場所で自由な時間を一緒に過ごすこと」である。つまり、好きな人と一緒に同じ場所と時間を共有することである。そして、子供達には、それを豊かだと感じる感性を育んでもらいたいと願いファミリーキャンプを始めた。

キャンプをすると気付くことがたくさんある。それは、至極当たり前のことだが、光（昼）と闇（夜）があり、大空と大地があり、植物と草木があり、太陽と月と星があり、虫と鳥がいる。これらは、天地創造の自然の基本要素であるが、私は豊かさの指標でもあると思う。現代の気密性・断熱性・遮音性の高い居住空間の中で、電化製品に囲まれた日常の暮らしは便利で快適であるが、「豊かな暮らしなのか」と自問すると腑に落ちない感覚がある。その理由のひとつは、これらの自然要素が、日常に存在はしていても、敢えて意識しなければ非常に感じにくいものであり、残念ながら日々の暮らしの中では豊かさとして感じにくい為である。

一方、キャンプは、自然要素に溢れ、自分らが快適に過ごす為には、タープを張って日陰をつくり、テントを張って雨風を防ぎ、焚き火をおこして光と暖を確保し、その火でお湯を沸かして空腹を満たすといった具合に、自らの手で快適な空間と環境をつくっていかなければならない。

しかし、そうした不便さの中で自ら快適な空間と環境をつくり上げる行為は、自然との一体感を感じ、そこで食べる食事は格別においしい。更にそれを皆で共有できると満足感が倍増する。そして、子供達を見ていると、こちらが何かを教えなくとも、遊具がなくとも、その豊かな自然の基本要素のひとつひとつの中に何かを発見し、手を出し、そこから驚きや感動を得ていることが良くわかる。こちらの狙い以上に、子供達は、自然要素との関係性づくりという「体験」を通して感性を育んでくれている。

【旭ビルウォール株式会社】

卒業して学んだこと

金子陽平（二〇〇七年卒）

私は大学を卒業して約十年になります。現在は主にマンションの現場監督として働いております。在学中は、材料施工系の枝広研究室に所属していました。また、四年間硬式野球部で汗を流していました。当時の野球部は東都大学リーグの三部に所属しており、四十五年前にリーグ優勝した時と比べれば非常に不甲斐ない成績ですが、その中で（自称）エース・主将として日々練習に励んでいました。

そんな、野球とわずかな建築の事しか知らない私ですが、社会に出て気付いたことを少しだけ書かせていただきます。

①チームプレーの大切さ

野球はチームプレーであることはご存じだと思いますが、社会も同じようにチームプレー（思いやり）であること感じています。特に建設現場はそれが顕著に表れるものだと思います。建設業は数十社の専門に特化した業の集いです。

現場監督はその集いをタイミング良く動かす仕事であります。そこで、悪いチームは個々が与えられた仕事をやる事しか考えていません。良いチームは、個々が与えられた仕事をやり、さらに次に作業する人がやり易いように、作業場を整理整頓したり、次の人に一言声掛けをしたりします。このように相手を思う気持ち（＝チームプレー）が、やがて良い建物が出来る（＝勝利）という形になっていく事を身に染みて感じました。

②先を見据える力を養う事

枝広先生は社会に出る前、『建物の仕上りから考える事。工程表を考えられる事』とおっしゃっていました。当時は深く理解できませんでしたが、これは建設業だけでなく、全ての物事に共通して言えるものだと、気づきました。

仕上がりを考える事は、未来をイメージする事であり、工程表とは計画する力です。野球ではバッターをインコースで抑えるようにするには、まずはアウトコースを攻める計画にします。社会でこの先を見据える力を養う事が成功につながると思います。

そんな私は、しばし先が見えずに悩む事があります が、職場の仲間、諸先輩方や学生時代の友人と共に相手を思いながら、日々頑張っていきたいと思います。

【株式会社　長谷工コーポレーション　建設部門】

建設業の担い手を考える

佐藤祐介（二〇一二年卒）

建設業で問題視されている「人手不足」について、いちぜネコン社員の目線で述べさせていただきます。

まずは統計データより人手不足について考えます。建設業就業者は五百万人程度と約二十年前と比較して二百万人程度少なくなっています。その中でも、近年では五十五歳以上の就業者の割合が約三十五％と上昇しているのに対して、二十九歳以下では約十％まで低下しています。これは、今後の就業者数が継続的に減るであろうということを表しています。また、技術力を持った熟練技能工が一線から退くということも意味します。

次に私の知る現場の現状や現場で聞く声を基に考えます。現在はオリンピック前の建設ラッシュで人手が足りていませんが、将来を見据えた場合にも、新築・改修・解体は別にして、やはり若手作業員の人手不足は否めません。そして、それよりも技術の継承がなされずに熟練技能工が現場を去る未来が恐ろしいです。現在就業している「若手」と呼ばれる二十歳代の現場作業員は、親と同じ工務店で働く二世の作業員、またそれに近いコネクションで建設業に就いた作業員が殆どであるように感じます。建設業界に入ることの間口が狭く感じます。

この問題に対して、「女性作業員の活躍の場を作る」や「外国人労働者の採用」などの解決策が推奨されていますが、根本にある若齢・二十歳代の作業の就労に対しては効果的ではありません。効果的な解決方法としては、建設作業員の賃金の改善が必要だと考えます。ただし、そこにたどり着くための道筋が難しいように思えます。

この問題は、早急に解決されなくてはなりません。前述したように、技術を伝えることのできる熟練技能工の引退が近づき、また技術を継承するのに必要な時間の確保も必要であるからです。

災害大国である日本では、地震・津波・台風などの災害が定期的に発生し、人々の暮らしを脅かします。暮らしを守り支えられる技術が途切れることなく、この先に続きますように願っています。私たちの世代は、これからの世代を生きるにあたり、協力会社やステークホルダーと共に創る為に何が必要か考えていかなければなりません。

【大成建設株式会社　関西支店　レッドウッド藤井寺ディストリビューションセンター新築工事作業所】

縁もゆかりも

森本大悟（二〇一四年大学院修了）

大学院を卒業して栃木県の設計事務所に就職してから二年半程が経ちました。短い期間ながら学校や庁舎、そしてスタジアムの設計などに関わる機会を得て建築の実践に携わってきました。幼少の頃からサッカーを続けてきた私にとってはスタジアムの設計に関われるとは興奮冷めやらぬものでどんな些細な部分でも面白いと思える事ができました。会社が栃木県のサッカーチームのスポンサーをしていたこともあり、幾度か地元の試合を見に行くこともありました。これまでの経験がこんなところで繋がっているとは思いもせず、ただ運の良さに感謝するばかりです。

就職で新しく住む事になった栃木という場所は私にとって縁もゆかりもない土地でした。地域名の漢字が読めなかったり、知事の顔を知らずに恥ずかしい思いをしたりもしましたが建築の設計を通して地域のことを知っていく事ができ、会社の人と遊びに出かけることで自然や文化の豊かな場所だと知る事ができました。例えば栃木の特産物である大谷石は昔の採掘場が資料館として開放されていて、観光感覚でその歴史を知ることもでき、街を歩けば大谷石を使用している建築を多々見つける事ができます。建築が地域の特性と深く結びついているものであることを実感した事の一つです。大谷石の蔵を改装したレストランや隈研吾の石の美術館など、こと土地に踏み入らなければ知ることも関心を寄せることもなかったかもしれないものに出会えました。今では栃木という場所は第二の故郷のように感じる場所であり、たった二年間でも縁もゆかりもできたのではないかと感じています。

東京近辺で生まれ育った私は、東京から離れることで初めて東京の人の多さと地方部の衰退ぶりを目の当たりにしました。人の少ないことが寂れた雰囲気でいいなどと言って片付けられることではなく、地域にとって死活問題であると分かります。縁もゆかりもできたこの土地が廃退していくのは寂しいもので、いつか何かできたらなぁとぼんやり考えています。

【A－S総合設計】

芝浦工業大学 建築学科合同クラス会「先生を囲む会」開催！

直海秀紀（一九七二年卒）

本年、四月二十三日（土）に豊洲キャンパス交流棟三階カフェテリアにおいて、芝浦工業大学　建築学科合同クラス会「先生を囲む会」が開催されました。

本校に在籍してから半世紀を過ぎた、一九六九年卒から一九七四年卒の六世代を中心とした仲間が一堂に会して、お世話になった先生を囲んで懇談するという一大イベントでした。

参加したOBは百四十名を超え、先生方は御着任順で冨永先生、吉田先生、石黒先生、石川先生、十代田先生、橋本先生、清田先生、相田先生、三井所先生、毛井先生、上村先生、塘先生のご出席を頂きました。

また、昭和三十年代ご在籍の大先輩の方々や、話を聞いて急きょ飛び入りを表明した後輩の特別参加もありました。

本会は午後三時開始で司会者の渡部精氏の開会の辞・小生の幹事挨拶の後、前半では枝広建築会会長のご挨拶を始めに六名の先生方から熱いお言葉を頂き、出席者全員の記念写真撮影で締めくくりました。

吉田先生の乾杯の音頭で始まった後半の懇親会では、会場の其処此処で数十年の時を超えた再会を喜び合うクラスメイトや先輩後輩、先生方と膝を交えて語り合うOBの姿が見受けられました。

後半でも三名の先生からお言葉を頂き、清田先生の中締め、田口継道氏（校友会顧問）の閉会のご挨拶と司会者の閉会の辞で午後六時解散となりました。記念として全員に集合写真のプリントをお渡ししましたが、皆様の充足した穏やかな表情を拝見して、昨年の三月以来一年間に渡って各六世代の幹事がほぼ月一回の会合を重ねて準備してきた苦労も、吹き飛ぶ思いでした。

建築学部が創設される前年において、建築学科の長い歴史の中に貴重な一頁を記すことが出来たのではないかと思っております。

また本会の準備過程で、多くの適切なアドバイスを頂きました枝広建築会会長と、開催会場の設定など数々のご相談にのって頂いた郷田先生に紙面をお借りして御礼申し上げます。

最後に御参加頂いた先生、OBはもとより、全ての建築会、卒業生の皆様の今後のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

【建築学科合同クラス会「先生を囲む会」代表幹事】

本会のDVDを作成しました。収録時間は約九〇分で会場の様子、御出席の全ての先生のご挨拶はもとより、全出席者の氏名、寄せられた全てのコメントも収めました。建築学科の歴史の貴重な資料として出席者の皆様のみならず、建築学科に在籍された方々のお手元に置かれ、折に触れご鑑賞頂ければと思っております。ご希望の方は左記までご連絡下さい。送料込二千円でお届けさせていただきます。

直海秀紀
〒九〇四－二一七二　沖縄県沖縄市泡瀬一－二〇－二二
コーポウィング三〇二
携帯電話　〇九〇－三五三四－二〇五八
hidenori.naomi@ezweb.ne.jp
パソコン　sph27ca9@bloom.ocn.ne.jp

2016年4月23日　建築学科合同クラス会「先生を囲む会」

第三回建築会同窓会

鈴木 泉（一九八六年卒）

建築会では、年に一度、建築会会員が集える場を設けたいという趣旨で、二〇一〇年以降、建築会総会開催年（三年毎）以外の年に、「建築会同窓会」と題したイベントを開催しております。

第一回は、二〇一〇年に建築学科卒業生でもある芝浦工業大学理事長の五十嵐久也氏に基調講演をお願いすると共に、当時、大きな話題を集めていた「東京スカイツリー」を題材とした講演会を開催しました。二〇一一年は、総会開催年であったため、第二回は、二〇一二年に、石川洋美名誉理事長、三井所清典名誉教授、枝広英俊教授（当時）、加藤國雄第二代建築会会長をお招きし、建築学科六〇周年を目前に控え「建築学科六十年の光と陰」と題した座談会を開催しました。二〇一三年は、建築学科六〇周年事業開催の準備年で開催せず、二〇一四年は、建築会総会と建築学科主催の六〇周年事業の後援を行いました。

そして、昨年末に、第三回の建築会同窓会を開催する運びとなりました。第二回の座談会が、教員側から見た学科史、という意味合いが強かった事から、第三回は、「卒業生が語る芝浦工大」という意味合いを込めた会として開催する事としました。

第三回も座談会形式として、司会に道田淳建築会副会長（九三年卒）、コーディネータに松寿章建築会副会長（七八年卒）を据え、パネラーとして功刀強氏（七六年卒、K&K都市建築設計事務所主宰）、中村行男氏（八一年卒、清水建設勤務）、乗物丈己氏（九五年卒、竹中工務店勤務）、永吉敏行氏（〇七年卒、大成建設勤務）をお招きし、功刀氏からは、アトリエ系設計事務所勤務を経て、現在、設計事務所開設に至るまでの体験談を、中村氏からは、自身の海外勤務経験とその後のリクルーターとしての体験談から見た芝浦工大卒業生に望まれる人間像について、乗物氏からは、在学時より培った体験談と打たれ強さを持つ芝浦工大卒業生の特色について、永吉氏からは、就職活動時の体験談と現在の業務経験を通した自身の取り組みについて、各々、思うところを語り合っていただきました。

会の出席者は、座談会が、卒業生八十有余名、在校生六〇有余名を数え、懇親会は、卒業生を中心に九〇有余名の参加を見ております。

建築会では、今後も、卒業生相互の親睦を深める会を開催して行こうと思いますので、その際は、是非とも、ご参加いただきたく、よろしくお願いします。

【株式会社日新工営　勤務】

二〇一七年度より建築学部が開設されます

堀越英嗣（教授／建築学部開設準備室長）

芝浦工業大学では、一九二七年に前身の東京高等工商学校が開学した時から建築系学科が開設され、以来〝芝浦建築〟の伝統を継承しながら、それぞれの時代に即した建築技術者を養成してきました。近年は建築の世界でも、従来とは異なる新しいニーズが生まれ、多様な価値観に対応した建築教育が必須となってきました。技術力や科学的知見とともに、哲学的・人文学的な見地からも建築を考えることが必要です。こうした動向に対応すべく、九十年目にして建築学部が誕生することとなりました。

新設される建築学部は、現在の工学部の建築学科と建築工学科、デザイン工学部デザイン工学科の「建築・空間デザイン領域」の二学科一領域を統合・再編したもので、「工学」「建築デザイン」「幅広い教養」の横断的融合による建築教育を実践することを目指します。

昨年度より建築学部開設のための準備室が立ち上がり、その室長を仰せつかった立場から新学部の紹介を致します。

幅広い三つのコースで建築・都市・空間をデザイン

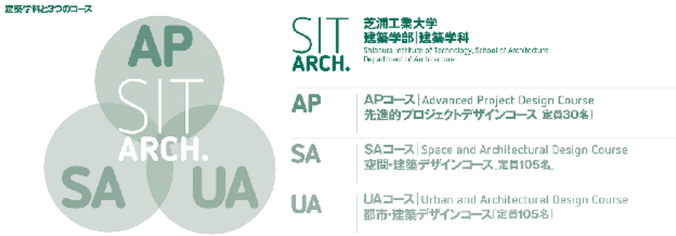
建築学部には、建築学科一学科の下にAPコース（先進的プロジェクトデザインコース）、SAコース（空間・建築デザインコース）、UAコース（都市・建築デザインコース）の三コースが設けられています。

APコースでは、災害復興、地域再生、エネルギー・環境問題などに取り組み、先進的なプロジェクトを通して、グローバルな視点から建築・都市・空間をデザインします。古民家再生、エネルギー・環境問題といった現代的な建築テーマを切り口として学ぶことで、問題発見・解決能力を養います。

SAコースでは、身の回りの空間から住宅・学校などのスケールに重心を置き、幅広い領域の建築技術を総合して豊かな生活環境を創造します。人々の生活や家族構成などを考えながら取り組むことを大切にし、良好な音環境や空気環境計画、デザインと溶け合う構造設計など、幅広く奥深い建築的視野を養います。

UAコースでは、人々の生活する都市、まちづくりなどのスケールに重心を置き、建築を通して世界に貢献することを目指します。過疎地域の空き家に対する移住計画の提案、CAD・BIMを活用した建設現場での生産性向上、省エネルギー性を高める改善策の提案など、実践的な学習を通して建築を考えていきます。

いずれも少人数クラスを徹底することにより、基礎的な建築技術と教養の修得を徹底し、知識・技術の土台づくりを行う一方、コースごとに特色のある専門科目を用意しています。



豊洲での四年一貫教育と充実した十分野二十九の研究室

建築学部は、芝浦工業大学で初めて豊洲キャンパスでの四年間一貫教育を実現します。豊洲周辺には、開発の進むウォーターフロントから門前仲町、月島など伝統的な面影を残す街並みまで、歴史と先進性が共存しています。すなわち「これからの都市の暮らし」の可能性を示す場所であり、斬新なプロジェクトや、建築的テーマにあふれています。

建築は、机上の学びだけではなく、〝先人〟の背中を見なければいけません。世界中にある歴史的建造物は私たちの先輩が成し遂げた仕事ですから、それを見ることが重要です。このことは、下級生が上級生や大学院生の背中を見ながら学ぶ意義にも通じます。同じ空間、同じ場所にいることによって刺激され、お互いに気づくことが大切です。これまで叶わなかった都心四年一貫教育が実現します。

さらに、多彩な専門分野と研究室選択の柔軟性も建築学部の特色です。十分野二十九の研究室を擁しており、卒業研究他では、学生が所属するコースに関わらず、自ら希望する専門分野と研究室を主体的に選択できる仕組みをつくりました。多様な分野を縦横に紡ぎながら新しい社会の価値観を創造できる人材を養います。

グローバルな視点で多様な人材を育成

芝浦工業大学は、二〇一四年度に文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」に私立理工系大学として唯一採択され、研究・教育のグローバル化を積極的に推進しています。また、ダイバーシティ推進にも力を入れ、女子学生や女性研究者の研究活動支援を強化しています。新設の建築学部もその一翼を担っており、「世界に学び、世界に貢献する理工学人材の育成」を理念として掲げ、グローバルな建築教育を展開します。海外実習科目を豊富に配置して、社会の諸問題を解決するための国際的な知見を身につけるのをはじめ、グローバルコミュニケーション能力や異文化に対する創造力、洞察力を養えるようにしています。

様々な改革とともに建築学科は生まれ変わります。一方で建築の本来の目的である「建築を通じて人を助けたり、喜んでもらうこと」の意義を忘れてはなりません。一昨年に六十周年を迎えた工学部建築学科で培われた歴史と伝統の継承、発展のために邁進して参ります。今後ともご支援のほどをよろしくお願い致します。

建築学部製図室棟の完成予想図

建築学科の近況報告

古屋 浩（教授／二〇一六年度建築学科主任）

学科の近況をご報告させていただきます。ご承知の通り、来年度から建築学部が開設され、学部一年生から四年生まで、豊洲校舎における都心一貫教育がスタートします。この七月末には、豊洲校舎中庭の一角に新しい製図室棟（平屋）の工事も始まり、また、八月には建築学部としての初めてのオープンキャンパスも行われ、多くの高校生が期待を持って集まってくれました。学科内も例年になくなにかと慌ただしく、アッという間に過ぎていってしまいそうな今年度の雰囲気です。

さて、二〇一五年度の学位授与式および卒業記念パーティは、三月十八日に東京国際フォーラムそして八芳園（港区白金台）にて執り行われました。建築学科第五十八回卒業生としてニニ名（内四一名進学）の若者が巣立って行きました。各賞の受賞者並びに卒業研究（論文・設計）の題目は以下の通りです。

□学業成績　最優秀賞・総代
　砂川 篤

□学業成績　優秀賞・有元賞
　手塚祐未

□学業成績　優秀賞
　吉成葵／内田有香／田嶋一士／星野耀
　髙島彰良／古田佚貴

□卒業論文　優秀賞（五十音順）
　澁井雄斗「回収骨材の性能評価と
　　利用促進のための実験的検討」
　住谷 司　「光散乱式粉じん計の較正に関する研究
　　- 較正用粒子の作成 -」
　高松田佳「中高層ビルの外壁改修構法」
　田嶋一士「コンサートホールにおける
　　響きの印象の多次元解析
　　- 残響感の時間的属性と質的属性 -」
　手塚祐未「川越の神社における神仏分離と
　　統廃合に関する研究」
　由井雄斗「時間領域有限差分法の室内音場解析
　　への適用に関する研究」
　吉成 葵　「市民参加による公共施設再編の
　　取り組みに関する研究」

□卒業論文　優秀賞・浜田賞（五十音順）
　林 克憲　「鋸状仕口を用いた
　　柱梁接合部の構造特性
　　- 曲げモーメント作用時の性能評価 -」
　宮川和貴「東北地方太平洋沖地震における
　　芝浦工業大学豊洲校舎の
　　地震時挙動の研究」

□卒業設計　最優秀賞・三浦賞
　柴田皓一朗「REFURBISHMENT　- 創造的修正
　　による世田谷区庁舎の編曲 -」

□卒業設計　優秀賞（五十音順）
　岡本隼樹「Hideout Sequence
　　- 都市とゴミ処理場の接点の再編 -」
　平良千明「ウージ畑のチャンプルー　- きび刈り隊
　　から広がる交流施設の提案 -」
　森 遊耶　「薄都漂村
　　- 道の駅の転換による地方再生 -」

□卒業設計　優秀賞・特別賞
　加藤賢一「みんなの家
　　- 除染廃棄物を用いた町の記憶の保存 -」

□卒業設計　入賞（五十音順）
　内田有香「線を浴かす
　　- 新しい駅前空間の生かし方 -」
　鈴木惇平「Slow Architecture　- 千葉市栄町に
　　おける風俗街を段階的に再編する -」
　田中太樹「劇テキ・サカ場 - 北区赤羽一番街の演劇
　　を核としたコミュニティ空間の提案 -」

二〇一六年度の入学式は、四月二日に東京国際フォーラム（ホールA）にて行われ、「工学部」建築学科としては最後となる一一四名の新入生を迎えることができました。数年前からイベントとして組み込まれている東京フィルハーモニー交響楽団のすばらしい演奏も入学式に華を添えてくれました。

来年四月には、いよいよ建築学部の第一期生が入学してきます。彼らの新しい可能性に是非とも期待したいところです。これまで六十有余年の間に築き上げられた工学部建築学科の伝統は、勿論新しい建築学部建築学科へ引き継がれなければなりません。皆様方のご期待にお応えできるよう、全教員一致協力して進むべきを進んでゆく所存でございます。何とぞ一層のご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

卒業生による業界研究セミナー二〇一六

建築学科主催の業界研究セミナーが二〇一六年一月十三日（水）に開催されました。卒業生を招いてのセミナーは、二〇〇四年から就職セミナーとして始まり、業界研究セミナーと名称を変えながら今回で十二回目の開催となります。建築設計・構造設計・設備設計・建築施工・建築行政に携わる五名の卒業生をお迎えして、各分野での仕事のやりがいと難しさ、自身がどのように進路を選んだか、今日につながる学生時代の印象に残る思い出等、後輩にだからこそ伝えられる内容を率直にお話し頂きました。

卒業して数年から十年ほどの若い先輩方のお話は、学生にとっても共感しやすく、自身の将来を考える良き参考になったようです。学部生、大学院生共に多くの学生が参加し、学生からの質問も数多く出されて盛況なイベントとなりました。

講演者プロフィール

□施工分野　上田大裕（うえだまさひろ）
　二〇〇五年卒（技術研究室）
　現職社名　大成建設株式会社
　現職部署　東京支店建築一部
　業務の内容　現場施工管理

□意匠分野　原嶋宏樹（はらしまひろき）
　二〇〇六年卒（川越研究室）
　現職社名　鹿島建設株式会社
　現職部署　建築設計統括Gr
　業務の内容　建築設計

□構造分野　足立幸多朗（あだちこうたろう）
　二〇〇七年卒（岸田研究室）
　現職社名　株式会社安井建築設計事務所
　現職部署　東京事務所　構造部
　業務の内容　構造設計

□設備分野　水村圭介（みずむらけいすけ）
　二〇一〇年卒（西村研究室）
　現職社名　株式会社大林組
　現職部署　東京本店　建築事業部　設備部
　業務の内容　設備設計

□官公庁　城向咲（じょうこうさき）
　二〇〇八年　南研究室
　現職社名　横浜市
　現職部署　建築局建築環境課
　業務の内容　CASBEE等、建築環境の
　認証に関わる業務

二〇一六年度 建築会費納入者

二〇一六年度の建築会会費（二千円／年）納入者の卒年と氏名を下記に紹介させて頂きました。皆様には厚くお礼申し上げます。建築会の益々の活性化・発展等のために有効に使わせて頂く所存でおりますが、今後とも更なるご協力の程を宜しくお願い致します。（役員・常任幹事一同）

昭34
石川憲一
池田 隆
藤内哲雄
鎮西義章
加藤國雄
岩井延雄
平野雅昭
工藤建
滝木昭一
向後伸子
昭30 昭26
梅津英夫
中村 弘
昭25
岩瀬定保
小泉 修
昭22
岩井 隆
元教員
樽 直樹
元教員
石川洋素

昭33
昭37
大平俊夫
徳村頼子
冨永宇三郎
宮嶋愛重
村田 保
小林 功
湯浅守孝
平野親一
佐藤勝利
小山正栄
小川真治一
大浦喜八郎
昭35
昭36
宣野茂一
久保田尚
横山達男
昭39

昭38
石井敏明
石井紘一
今井
片山久美子
北川良和
本間勝三
三門一夫
宮澤正倫
櫨田俊光
小池和司
清水哲男
白子隆
田辺憲三
辻村 進
難波良織
三浦敏彦
村杉隆夫

昭40
柴田邦彦
白谷武一
谷端順一
永谷輝孝
中西 進
吉川潤男
増本裕忠
吉田 勇
石鍋元章
小澤留明
勝又徳蔵
畑 聡一
丸山清男
阿部素資
伊藤千秋
河井 洋
佐藤公松
手島喜博
永井 泉
中村良次
仁木勝清
宮内古勝
山田一竹
井家鈴雄
曽根 稔
遠藤 勉
勝部臣男
狩野三雄
北川 亨
久保博文枝
染谷 清
雷巻智信
早川 昇
平沢 勇
山田耕資
米澤 稔
阿部安行
家本喜久雄
加瀬敏一
川崎政喜
小林昌彦

昭41
昭42
昭43
昭44
昭45
佐藤元一
篠原 亨
成宅弘治
平林豊治
山本 勇
昭50
校広英俊
唐沢 勉
河合 誠
昭51
太谷和俊
古藤光臣
杉山 米
須田昌孝
宮尾栄男
昭52
辻村 建
橋本貞章
福田俊次
峰岸 厚
宮本裕義
山田 洋
和田伸一
渡部 精
阿武隈川修
新井規治
伊藤達人
高原三平
田中康彦
長谷川義明
永渕文治
永嶋達雄
西村 修
村石俊郎
山崎宏史
石山剛伍
加藤泰久
鈴木秀幸
岩瀬 繁
校広秀子
加沼喜久夫
河村和明
川本勝一
昭46
昭47
昭48
昭49
昭53
昭54
昭55
昭56
榎元茂俊
酒井 強
三宅 拓
春日義則
小林 中
齋藤修一
中野隆夫
阿部澄夫
伊東昭博
菅原紀昭
早川金光
若井俊彦
天羽英雄
金岡 敏
須賀研太郎
竹原基好
寺門慶一
西村一孝
荻野正雄
渡辺真一
岩田和重
清川建司
佐々木隆
鈴木幸司
田浦英典
高橋延幸
田口昌男
月居利久
富安伸好
林 周三
本宮庸一
弓達和彦
今村 司
大彩 豊
笠井義文
吉見光宣
銭元田延
釜井重一
美原剛太郎
川島 聡
清水国寿

昭57	村田優	平21	島﨑望
	大崎閲男	平22	降旗孝至
	片山淳夫	平24	木村康孝
昭58	宮下俐	平25	増田知久
	千須和正夫		中島由紀保
	平澤龍一		望月政成
昭59	久本雅義	平26	伊藤宏亮
昭60	伊藤政人		岩間信彦
	千葉実		柄澤祥雄
昭61	加藤徹也	平27	多久和大海
	小山滋		角田文宏
昭62	有吉尚		三島圭人
	沼田俊紀		
平01	昆野雄吾	平11	渡辺将宏
	山下浩司	平12	古市隆志
平02	砂野公一	平14	大森真
	川口英樹	平16	正林一紀
平03	大日向利之	平18	森本和生
			守屋仁

＊卒年欄で、工経建とは昭和30年卒。

会費納入のお願い

前年度の決算は左記の通りとなっております。年会費納入率は、ここ数年変わらず低調で、**活動資金が目減りしてきております。**

年会費は、建築会にとって一番大きな収入源ですし、今年度からは新体制の元、引き続き会報の刊行費用、学科との共同事業などに頑張って参りますので、**年会費納入につきましては、一層のご理解とご協力をお願い致します。**

納入方法につきましては、封筒に記載されている会員番号をご記入の上、同封の郵便振替用紙で、年会費二千円をご送金下さい。個人情報に変更があった場合は、通信欄にご記入下さい。

編集後記

今号も、お忙しい中、原稿を快諾して下さった卒業生の皆様、先生方、関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。今年はまだ大きな節目となった「建築学科創立六十周年記念事業」の余韻が続いておりますが、このように毎年変わらず卒業生の皆さまの近況と学科の今をお伝えすることができるのを嬉しく感じております。さて、来る二〇一七年度は、母校では建築学部の開設や豊洲校舎での一貫教育が始まることになり、まさに歴史に新しい一ページが刻まれる記念の年となります。そして、私たち建築会でも一番大きなイベントである、三年に一度の『建築会総会・同窓会』が開催されます。卒業生の皆さま、新しい歴史を刻み始めた豊洲校舎に、ぜひお越し下さい。思い出を語るのはもちろん、母校の新しい胎動を皆さまとともに感じ取り、お話しができることを楽しみにしております。

道田淳（一九九三卒）

2016年度　会計報告

（2016.7.31現在）

収入	繰越金	普通貯金（会費受入口座）	1,046,206
		銀行預金（記念誌事業）	403,173
		現金	231,602
		（小計）	1,680,981
	年会費振込（会員）	2,000円×219名	438,000
	入会金（新会員）		303,000
	寄付		54,000
	雑収入　同窓会		35,248
	60周年記念事業貸出金回収A	（郵便貯金）	209,000
	60周年記念事業貸出金回収B	（銀行預金）	466,095
		（小計）	1,505,343
	計		¥3,186,324
支出	会報第31号印刷費（5,160部）、封筒・払込取扱票／出欠はがき（4,650部）		369,818
	宛名シール／封入代／残部送料		93,580
	（発送料）4,581通×81円		371,061
	会報デザイン校正料		108,000
	ホームページ維持費		112,751
	事務費　通信費		0
	振込手数料		3,024
	建築学科卒業お祝い金		20,000
	卒業生幹事記念品		56,916
	計		¥1,135,150
次期繰越	普通貯金（会費受入口座）		992,404
	普通預金（記念誌事業）		869,268
	現金		189,502
	計		2,051,174
支出＋次期繰越金			¥3,186,324

建築学科六十周年記念誌のご購入申込みのご案内

建築学科創設六十年の主な変遷、歴代教員・卒業生の寄稿、建築学科の近況、記念式典の記録などを纏めた一冊（約二〇〇頁）。お求めの方は、左記の要領にてお申込み下さい

◎申込先　芝浦工業大学　建築会事務局
〒一三五ー八五四八
東京都江東区豊洲三ー七ー五

◎申込方法　現金書留による申込み、または会費納入時の郵便振替用紙による振込み

◎記念誌代　三五〇〇円（但し、残部が二〇〇冊の為先着順とさせて頂きます。）

◎申込期限　二〇一六年十二月末日